

# 函館市における市街地の拡大

渡 辺 英 郎

函館市の人口は30万人をわり減少傾向にあるが、世帯数は増加しており宅地開発も盛んで市街地は急速に拡大している。本報告は函館市における市街地の拡大を図化し、その様子を地誌的に記述することを目的とする。方法は国土地理院発行の地形図を判読して年次ごとの市街地を画定した。これと地形区分と対比して、市街地の拡大と地形との関係を考察した。

使用した地形図は、5万分の1地形図は明治29年製版、大正4年測図6年製版、昭和20年部分修正測図、平成2年修正3年発行のもの。2万5千分の1地形図は昭和34年発行、昭和51年発行（空中写真は昭和48年7月撮影）、平成2年発行（空中写真は昭和63年8月撮影）、平成9年発行（空中写真は平成5年11月撮影）のものである。地形区分図は大淵玄一の区分したものを使用した。

## 1. 結 果

市街地の拡大の推移を函館市における市街地拡大図（図1）のように5段階に区分した。すなわち、1896年（明治29年－明治期）、1915年（大正4年－大正期）、1959年（昭和34年－昭和中期）、1973年（昭和48年－昭和後期）、1993年（平成5年－平成期）である。

## 2. 考 察

市街地拡大図を図2の等高線図と図3の地形概念図と比較してみると次のようなことがわかる。

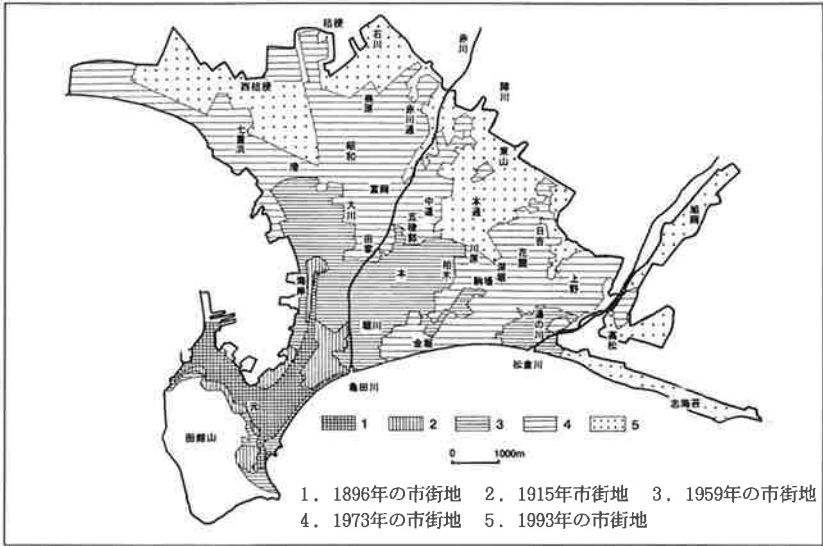


図1. 函館市の市街地拡大図

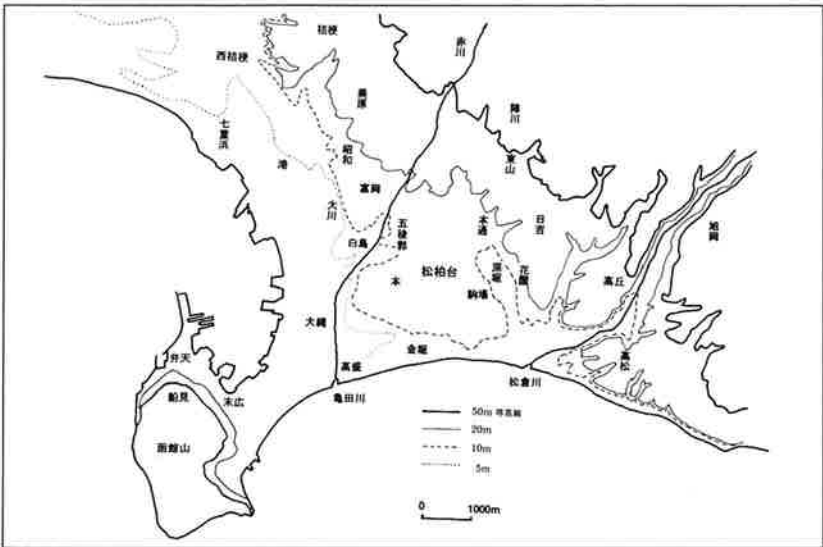


図2. 函館市の等高線図



ら亀田川扇状地へ。もう一つは七重浜の砂丘・浜堤への展開である。港、亀田港、昭和、亀田本、大川、八幡、田家、白鳥、五稜郭、中道、富岡、美原、鍛冶、柳、川原、深堀、湯浜、花園、日吉、榎本、戸倉、高丘、上湯川が市街地になっている。

1993年（平成期）には鮫川中流部低地の本通から東山の海岸段丘面へと駆け登り、他方は桔梗扇状地と西桔梗の西部低地への展開である。前者は本通、東山、山の手、旭岡、志海苔、後者は石川、西桔梗の各町が市街地になっている。

1993年の市街地範囲はこの当時の市街化区域の範囲と一致している。また東部と北部ではおよそ50メートルの等高線と一致している。

現在の市街地は図1の範囲にとどまらず市街化区域の外縁である赤川、陣川まで拡大している。これは市街化区域の地価高騰で20年ほど前から都市計画区域外の無指定地区である東山、陣川、赤川、亀田中野で宅地開発、工場建設が行なわれて郊外流出が増えた結果である。すでに1800戸を数えており、今後も2000戸の分譲予定がある。そこで函館市は都市計画の見直しをおこない、1970年以来の区域拡大して1997年4月から無指定地区の2550ヘクタールを市街化調整区域に編入した。

函館市域は昭和41年に銭亀沢村との合併、昭和48年に亀田市との合併で拡大した。合併時の亀田市の人口は6万9050人であったが、平成3年の亀田支所管内人口は11万8683人となって18年間におよそ2倍に増加しているので合併が市街地拡大にもたらした影響は極めて大きかったことがわかる。

図4、図5は1978年から1998年までの支所別の世帯数、人口の推移であるが、亀田支所管内（富岡、中道、山の手、本通、鍛冶、東山、美原、桔梗、昭和、石川など）だけは世帯数も人口も増加していて、これが北部地区の市街地化の要因となっていることがわかる。これに対して市の西部地区や商店街のある中央地区（本庁分）の人口は減少している。昭和48年から平成3年までの13年間にそれぞれ24%、30%の減少であり、これらの地区から亀田地

区への人口移動が進んでいる。

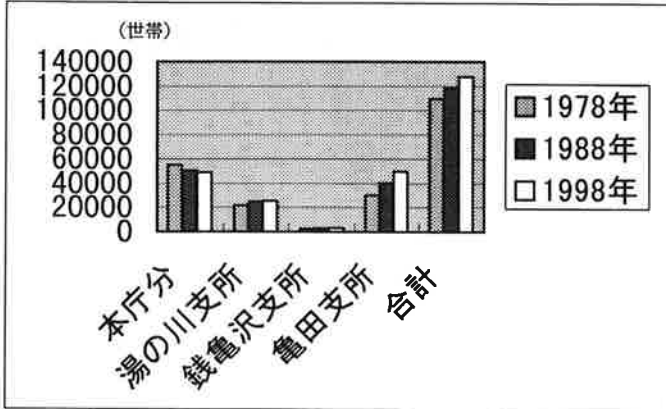


図4. 函館市の支所別世帯数推移

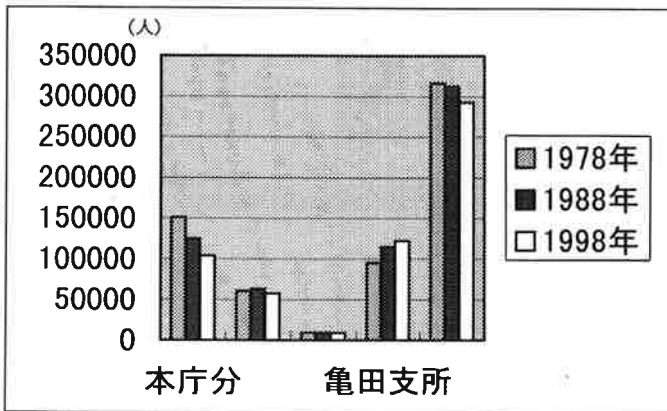


図5. 函館市の支所別人口

図6のように函館市の人口は減少傾向であるのに対して近郊の大野町、上磯町、七飯町は増加傾向にある。これは函館市内よりも安価な宅地開発が進み、交通網も整備されてきたことから若い世帯を中心に函館市内からの流入が続いているためである。



### 3. 函館の市街地とゴミ

函館の地形は海に浮かぶ函館山と半島部の陸地とが砂州でつながってできた陸繋島の地形である。砂州部分は標高5メートル以下の低地でそのうえ凹地が多く、宅地化の障害となった。そこで、明治、大正時代には現在の東川町付近の凹地をゴミで埋め立てた。市内からでたゴミは太平洋戦争中は八雲町の八木農場、亀田村の園田牧場に運ばれ土地改良に使われたこともあったが、市内からでたゴミの半分はゴミ馬車によって主に花園町、五稜郭町の凹地に埋設した。日乃出町にはゴミ焼却場があったがここだけでは処理しきれず上野町の谷まで運んで埋め立てた。昭和47年日乃出町によりやく近代のごみ焼却工場ができたが、焼却できないものは昭和45年から中の沢に捨て、ここが一杯になった平成8年からは七五郎沢がごみ埋め立て処分場として使用されている。七五郎沢の処分場の面積は27.3ヘクタール。埋め立て量は448万7千立方米で27年9か月間使用できるといわれている。

中の沢や七五郎沢が使用されるまでは市街地の凹地は格好のゴミ捨て場となり埋め立てられていった。やがて凹地の景観は一変してその跡地には学校や住宅が建ち市街地化した。したがって、標高20メートル以下の平地に散在した凹地の埋め立て、宅地化にゴミの果たした役割は大きかったのである。

### 4. 昭和後期、平成期に展開した市街地

#### (1) 松柏台に位置する学校群

松柏台に位置する学校群は二つに分けられる。一つは台地上に立地する群であり、一つは台地縁辺に立地する群である。

台地上に立地する群は遺愛学院、中部高校、旧大谷高校、千代台小学校である。

松柏台の市街地化のはしりは大正期に元町から中学校、女学校の移転である。松柏台の高台の地形は中部高校のグラウンドの一部や周囲に残っていたが昭和29年の改築工事によって消滅した。現在ではこれらの学校と的場中学校とは一続きの平地になっていて地形の段差はみられないが、昭和30年代まで

は松柏台が南に低く傾いている様子が観察できた。また的場町の低地を走る道は排水不良の悪路であった。

もう一つは台地縁辺に立地する群で旧函館商業高校、函館東高校、函館大妻高校、函館工業高校などの学校群である。ここは松柏台の北部と沖積平野の境界で五稜郭史跡もこれに続く低地帯で松柏台の北縁一帯にあたっている。これらの学校群の成立は大正時代から昭和30年頃である。学校群成立当時は学校敷地の北部一帯は水田であったが、昭和60年代に入って急速に宅地化した。

## (2) 松柏台の住宅化

この時期に住宅化したのは松柏台東部の柏木町、駒場町、深堀町地区である。ここは北に傾斜しており柏木町、深堀町には小さな侵食谷が北に、東に発達していた。松柏台東部の表面や侵食谷は畑地として利用され、深堀町の奥に柏木病院があった。宅地化が進んだのは昭和30年代中頃である。柏木町には市電の車庫があって電車の利用が便利であったが、深堀町は電車の本数が少なく不便なところであった。深堀町に国鉄職員住宅や独身寮が、駒場町に市営住宅が建築されると注目されて宅地化が進行した。また市電利用者が増加して駒場町に市電の車庫がつくられた。こうして電車の運行本数が増えて便利になると、市電沿線には病院、教会が建つようになり、周辺の畑地の地価が値上がりしてドーナツ化現象がみられた。その後国鉄解体によって深堀町の国鉄職員住宅や独身寮は平成5年には消滅して空洞化していたが、9年には住宅団地となっている。

## (3) 松柏台外縁に広がる低地の住宅化

昭和30年代に入って深堀町の侵食谷が国鉄の職員住宅で埋まるようになるとその子弟の就学のために深堀中学校が開校した。その後中学校の東側に市営住宅団地ができた。その隣の低地は埋め立てられて市民会館が建設されたころには深堀町の住宅化はかなり進行した。この低地は標高10メートルに満たない泥炭層の凹地で、雨天時には排水路の役割をしていた鮫川が詰まり低



地一帯はダム化して浸水常習地域であったが昭和40年の水害後に着手された鮫川改修工事によって解決した。

金堀町は昭和2年に函館少年刑務所が千代台から移転した。この周囲は畑地で土地が低く、盛り土をしなければ住宅を建てられなかった。昭和30年代に警察学校ができ、40年代に金堀小学校ができ、運輸省函館陸運事務所が大手町から移転して市営バス路線が通じるようになったところから宅地化が進んだ。函館陸運事務所は50年代に西桔梗町に移転した。

#### (4) 海岸段丘上の住宅化

東部地区の人口増加に伴い函館市は昭和41年に函館北高校を日吉町に建設し、市営バスターミナルを深堀町から日吉町に移転した。ここの地形は南西に傾く海岸段丘で畑作農業が行われていた。農家は地下水を利用して生活していたがラサール高校が新設された昭和33年ころに水道の敷設が始まり、市営住宅団地や道営住宅団地、民間の住宅団地開発が盛んになった。柏木町から有斗高校が移転したのもこのころである。昭和40年に函館市公営住宅5か年計画がはじまったころから海岸段丘上の農地の宅地転用がすすんだ。団地の都市化につれて昭和40年代に日吉が丘小学校、50年代北日吉が丘小学校、北中学校が開設された。産業道路（函館上磯線）は海岸段丘上を湯川から上磯町を結ぶ主要道路で昭和47年の都市計画図によると最も外側の環状線として描かれている。旧道を拡幅して国道5号と228号とのバイパスとして整備され市営バス、函館バスの路線であるところから、バス停留所からどれだけ離れているかで地価が左右された。海岸段丘上は波状の起伏と侵食谷が発達している。産業道路は波状の起伏と侵食谷を横断して走っているところから道路の両側の高さは道路面とフラットになっているところと、段差のあるところとがあり、道路面とフラットになっているところから建物が立ち、段差のあるところは土地造成に費用がかかるために敬遠されて空洞化していた。昭和40年代に函館山麓にあった白百合学園が本通の海岸段丘上に移転した。この頃、東山町の鮫川の支流の侵食谷の住宅化が始まった。ここは低平で土

地造成の必要がなかったからであろう。昭和50年代に入ると山の手町、東山町の海岸段丘上の畑が住宅化した。60年代になるとバス路線も開設された。本通の侵食谷はおよそ10年間ほど宅地化から取り残されてゴミ捨て場、土捨て場になっていたが、平成年代に入った頃から土地造成されて大型店舗や分譲住宅地になった。

#### (5) 旧亀田川沖積地の住宅化

五稜郭史跡の背後にあたる旧亀田川の沖積地はほぼ西から東に傾く標高15メートルから10メートルの鮫川流域で水田耕作地であった。昭和40年代半ばを過ぎたころから市街化区域のど真ん中となり、周辺の都市化で生活排水が流入したことなどから休耕田が目立ってきた。そこで亀田農協は土地区画整理組合を作って国や北海道の補助金を投入して約50ヘクタールの本通ニュータウンの造成をして昭和50年から分譲を開始したのが農住団地である。造成地の基盤整備には函館空港滑走路拡張工事の残土石が使われた。団地内の道路や歩道は舗装され、上下水道完備した1200に及ぶ分譲地は数年で住宅化されて小学校2校、中学校1校が新設された。東西に走るメインストリートの本通中央線沿いにはスーパーマーケット、コンビニエンスストア、カーショップ、釣り具店、内科、産婦人科、泌尿器科、皮膚科、眼科、歯科などの病院、薬局、整骨院、ガソリンスタンド、靴屋、おもちゃ屋、本屋、写真館、仏具店、八百屋、洋菓子店、ファミリーレストラン、食堂、回転すし店、郵便局、銀行、農協などが立地して、無い物はデパートだけという商店街形成がすすんでいる。複数のバス路線も開通して通学や都心への買い物にも便利な位置を占めている。また洪水対策として鮫川護岸整備工事による親水空間がつくられている。水田の跡形はすでになく鮫川用水堰跡がわずかに面影を留めるもののこれの用途に関心を持つ住民はいない。

#### (6) 亀田川扇状地東縁の住宅化

神山、中道、鍛冶の各町がのっている亀田川右岸地区で扇状地の東縁部にあたる。古くから近郊農業が行われてきたのだが、昭和30年代に五稜郭地区

に渡島支庁、北海道新聞社、函館警察署などが移転して副都心が近くに形成しはじめると、そこに近接しているというのでこの地区が注目されはじめた。宅地化は神山、鍛冶に通じるバス路線の沿路である中道地区からはじまった。鍛冶に町営住宅がたち46年に亀田町から亀田市となり、48年に函館市と合併したころには鍛冶団地のような大規模な住宅団地開発がおこなわれた。また、千代台から大谷高校が安価な広い敷地を求めて移転すると、これらが核となって農民オーナーのアパート群や新しい住宅が増え、その間にドーナツ状の農地が目立つようになった。平成年代に入ると扇状地東縁地区と旧亀田川沖積地をつなぐ本通中央線が開通して路線バスが走り、五稜郭公園の裏手にみられたドーナツ状の畑は全く消失してしまった。扇状地東縁地区が旧亀田川沖積地よりもおよそ20年も都市化が早かったのは扇状地で比較的排水がよく、自然堤防を利用した交通路があったことに起因している。平成9年には渡島支庁は美原町にあった運転試験場が石川町に移転したのでその跡に移転した。

#### (7) 亀田川西縁の住宅化

南下して扇状地をつくった亀田川の流路は松柏台に阻まれて流路を蛇行しながら西へ変えたため五稜郭公園西側の沖積低地には、自然堤防、後背湿地、河岸段丘、などの微地形が散在していた。自然堤防上には古くから亀田八幡宮に通ずる道路が開鑿されてこれが亀田から函館市内へ入る主要路となっていた。この道の両側は低く湿地になっていたので住宅化から取り残されたが、古くから函館師範学校（教育大学）、専売局タバコ工場（現在の開発建設部はこれの跡地）が立地した。亀田川の旧河道の谷が宅地化を阻んでいたのである。昭和30年に田家町の水田跡に4階建ての道営アパートが、続いて市営住宅団地が開発され、これらが核となって扇状地西縁の住宅化が活発となった。昭和60年代に入ると道路改修に伴う亀田川の架橋工事、河川改修によって河畔の低湿地が埋め立てられて宅地化した。平成年代に入ると老朽化した道営、市営住宅は再開発されて新しい団地に生まれ変わった。

函館市内では宮前町、梁川町、白鳥町、八幡町は亀田川扇状地の末端部分にあったっているが、旧亀田川の河道跡であったために排水不良で住宅化が遅れていた。この地区が注目されて宅地化が始まるのは昭和30年頃に五稜郭公園前からガス会社間に市電が通じてからである。この路線は平成5年に沿線人口の急減により廃止された。

### 5. 亀田川扇状地の住宅化

石川町に運転試験場が移転し美原台ニュータウンが売り出されている。大学も開校予定となっているので、新たな市街地が形成されるのもそう遠いことではないのだが、ここは農地をめぐる汚職事件の発生地となっている。1992年農地転用をめぐる農業委員の汚職事件、市街化調整区域に住む農家による有印私文書偽造事件、不動産会社による宅地開発にからむ国土法違反事件である。これらの事件の背景として都市計画の遅れが指摘されているが、市街地の拡大は市政の構造の反映であることは間違いない。

### 6. まとめ

1973年からの市街地拡大は人口増加によるものではなく、世帯数の増加と新築住宅建設によるものである。増加世帯のなかで注目されるのは道内で勤務した退職者の転入である。民間の大規模住宅団地開発も市街地拡大要因である。農地潰瘍がすすみ近郊農業は消滅しかけており、わずかに残った農地は汚職の舞台となっている。

### 文 献

- 田辺健一 (1962) : 市街地の拡大と人口移動—仙台の例で— 東北地理14—3  
奥平忠志 (1970) : 函館近郊亀田町の変容、東北地理22—2  
中川 重 (1986) : 山形市における市街地の変化について、東北地理38—1  
渡辺英郎 (1992) : こんな町です函館、函館工業高等専門学校  
大淵玄一 (1996) : 函館の自然地理、長門出版社